

ろを選択して出現している割合が非常に多い。しかしながら、一続きの尾根を見た場合に、尾根の傾斜の変換は数多くあるが、尾根のすべての傾斜変換部でBo地形、T地形およびそれらの複合した微地形がみられるわけではない。調査した尾根全体でみると、これらの微地形の発達率は1割未満である。

キーワード：微地形、半碗状地形、テラセット、斜面プロセス、生駒山地北部

P7. 自然堤防および後背湿地の堆積相と堆積速度—濃尾平野北部を例に—

堀 和明・上田宏樹・宇佐美勝悟（名城大）

Kazuaki HORI, Hiroki UEDA and Shogo USAMI: Sedimentary facies and accumulation rates of natural levee and floodbasin deposits: an example from the northern part of the Nobi Plain

濃尾平野の河成低地を構成する旧河道と自然堤防上でオールコアボーリングを実施し（AP1とAP2コア）、それらを構成する堆積物の特徴や堆積時期、堆積速度を検討した。採取した堆積物のうちユニット6-9が、本研究の対象となる河成堆積物である。ユニット6は有機物や植物痕を多く含む泥層で後背湿地（氾濫盆地）堆積物と考えられる。ユニット7は砂礫層を主体とすることやかつて揖斐川がここを流れていたことから、河川流路堆積物と解釈される。ユニット8は砂質堆積物からなり、深度方向の粒度変化が大きいこと、および掘削地点が自然堤防上であることから自然堤防堆積物と考えられる。ユニット9は水田土壌（耕作土）である。AP1コアのユニット6（後背湿地）の最下部からは約3200 cal BPの年代が得られている。ユニット6の最上部に近い深度の年代は、AP1コアで1500 cal BP、AP2コアで600 cal BPである。また、AP2コアのユニット8の最下部（自然堤防）の年代は約420 cal BPであった。年代測定結果から堆積速度を推定したところ、後背湿地堆積物はAP1コアで約0.1 cm/yr、AP2コアで約0.2 cm/yrとなる。一方、自然堤防堆積物は約1.5 cm/yrで、後背湿地堆積物の堆積速度に比べて約4-15倍大きい。

キーワード：河成堆積物、氾濫堆積物、海水準変動

P8. 中国山地における地すべり地形のマッピング

井口 隆・清水文健・内山庄一郎（防災科研）・
大八木規夫（深田地質研究所）

Takashi INOKUCHI, Fumitake SHIMIZU, Shoichiro UCHIYAMA and Norio OYAGI: Landslide distribution map on the Chugoku Mountains

防災科学技術研究所では、1982年より縮尺5万分の1で地すべり地形分布図を刊行してきた。これまでに東北・関東・中部・近畿地方の刊行を終えた。判読を終えた地域の地すべり地形の分布状況について、予想以上に多く存在していることを明らかにし、斜面地形の形成に地すべり変動が大きな役割を果たしていることを示してきた。昨年、中国地方の地すべり地形判読を行ない、地すべり地形集成図を作成した。

地すべり地形の判読はこれまでと同様に4万分の1モノクロ空中写真の実体視判読により進めた。中国山地はたたら製鉄のための鉄穴流しが盛んに行われた地域であり、その跡地が地すべり地形に類似していることが判読中に分かった。そこで貞方昇著「中国地方における鉄穴流しによる地形環境変貌」を参考に地すべり地形との判別を行なった。

作成した地すべり地形分布図の範囲は、5万分の1地形図66面分で、範囲内に12200余の地すべり地形が確認できた。5万地形図1面あたりの地すべり地形数は200足らずで、東北地方・